



お喋り王と
喋り龜との話

とよ子

昔く印度と云ふ國のある處にそれはくは喋り
 好な王様がありました。此王様はお名前をバ
 ハマダツタと申上げまして大層お伶俐な王様で國
 は大きく人民は澤山で一時は大層な評判でありま
 した。餘り王様が喋りをするので先づ第一
 にお傍の役人が困り始めて遂に政治をする大臣迄
 も困つてしまひました。
 大臣などが何か申上ることがあつて王様の前へ出
 様ものなら、何んな急がしい用事があらうがそん
 なことには頓と御遠慮もなく御自分の御仰りたい
 と思ふことはベラ／＼と止め度なく仰せにな
 るので大臣は退がることが出来ないで困つてしま
 ふのが常でありました。また時々王様の御前で
 本のお講釋を申上げる侍講と云ふ役人が王様の

前へ出て

侍「是より何々の御本を御講釋申上げます」と申上る

王「マア、待つたく、其前に一寸話したいところがある。先刻私がね、裏の方を散歩して居たらね草叢の中から一疋の青大將が出て来て、小さな蛙、丁度此位の蛙を呑まふとしたよ。夫れから不……」

と王様は例に因つて夫れから夫れへと一人でお喋りになりなすので其日も遂々御講義の時間がなくなつてしまひました。毎日、此様な事ばかりして居ましたので國の政治は何もかも届かない事ばかりで國中の人達は皆困てしまひました。夫れでも王様は一向御構ひなく毎日朝起きてから夜御寝みになる迄ベラベラと御飯を召上る時でも御湯に入りの時でも鬚をお剃りの時でも片時も口をお休めなさることはありませんでした。此王様のお庭の池に年古く住まつて居る一疋の龜がありましたが、此龜がまた一通りならぬお喋り好きで何んでも仲間の鶯の話に因ると一日の喋り方

は確かに王様よりも多いだらうと云ふことでした。それでガア／＼の鶯も、カア／＼の鳥も連も龜に叶はないので仕まいには誰も此龜の相手になるものがありませんでした。龜は是には氣が付かないで自分一人豪いもの、様に思つて彼方へ行つては鶴の悪口を云つたり、此方へ來ては金魚や緋鯉を馬鹿にしたりして居ましたので遂々お庭中のものに嫌はれて仲間に入れて呉れるものがありませんでしたので流石の龜も少し閉口の様子でした。

或は喋り好の小鳥迄「小鳥、アア、眞常にアノ龜にも困つて仕舞ふよ、誰れか何處へ連れて行つてしまへばいいなア」と云ふて居る位でした。

初てそうこうする中に夏が來まして一体が暑い印度の國は大層な暑さになりました。そこで王様は例年の通り今年もヒマラヤ山と云ふ日本の富士山よりも高い／＼お山の中程にある王様の別荘へと避暑に御出になりましたのでお殿の中には少し用があつて殘つて居た侍講の役人が唯一人居たきり誰れも居らずお庭の中の生物も鶴

や鳶を始め大抵は連れて行かれて残つたものは忘れて行かれた例のお喋り龜丈で誠に淋しくなつて仕舞ひました。其中に侍講のお役人は仕掛けた仕事もお仕舞になりしたので扱て是から王様の處へ御機嫌伺に参りませうと荷物を持つて長い廊下を歩いて來ますと今しもお庭の中で例の龜が松の木に休んで居る一匹の雁と話をして居る處でした。「王様の別荘のある所つて、餘程いゝ處かね？」雁「それはお前さん、いゝのなんのつて、逆もこんな所ぢやないよ、なんしろ、時候はいゝし、景色はいゝしまるで繪の中に住んで居る様なものさ僕等は見からそこへ行く所なんだ、お前さんも一つ出掛けては何うだね、なんなら連れ行つて上げ様か？」

「それは一つ是非行つて見たいけれどもナア、僕には羽根がないんだから困つたナア、歩いて行つては随分長く掛るだらうし、一体何里位あるのかね」と聞きますと

雁「何里ツて、お前さん百里からあるんだもの、逆も歩いてなぞ居たら一日や二日ぢや行かれや

しないよ、ナニお前さんが行く氣なら私達が二人で連れて行つて上げ様、別段六ヶ敷の事はないさ、先づお前さんは喰いつくことが上手だらう。それだから一本の棒を喰へるさ、そして私達が其兩端を喰へて飛んで行けば譯はわりやしない」と云ふので龜は大喜で

「それはうまい。それぢや早速出掛け様」と龜は手頃の棒を探がして口に喰はへ二匹の雁は其兩端を喰へて飛び出しました。

是を見た池の中の金魚や鯉鯉達は大喜びで空高く飛んで行く龜を見送りながら大きな聲で

魚「お喋り龜さん、もう歸つて來なくつてもいゝよ」と云ひましたもんですから龜は少し腹だしく思つて

「ナニ、こんなきたない池など二度と再び歸つてなど來るものか、夫れよりもお前達こそいゝ所へ行けないで羨ましいだらう！」と云はうとして聲が喉迄出ましたがふと氣が附いて見れば自分は今空高く飛んで居る身、若しお喋りして口を開かうものならそれこそ大變身軀はふらくと

地面へ落ちて粉微塵に碎かれるにきまつて居る
 オー恐いことくと漸くのことと黙つて居りまし
 た。二匹の雁は何時になく重い龜を間に連れて居
 るので中々疲れるのですが夫れでも一生懸命で野
 を越へ山を越へ川を越へ海を越して其晩は、とわ
 る山の中の大きな松の木に宿まることにしまし
 た。そして雁は龜を危険くない處へ下ろしてホッ
 と一息ついて

「先づ今日一日は無事で御目出度う。何う
 も龜さんお前さんは何んだか直に話をしそうで
 危険くて仕方がないわしたは忘れても話など仕
 たいななと思つてはいけないうよ。」と云つて呉れ
 ました。さうに違ひないので龜も
 「ア、百も承知二百も合點明日も明後日も大丈
 夫ヒマラヤの別荘へ行く迄は死んだ氣で黙つて
 居るよ、と云つて居ましたが六ヶ敷いものでし
 た。

さて、其夜も明けて翌日の朝になりますと昨日の
 通り龜が棒を喰へると雁は
 「サア、今日も決して口を明けてはいけないうよ」

と云ひながら棒の兩端を喰へて飛びだしました
 下を見ると野も山も家も木も回り燈籠の様に飛ん
 で行き、切つて行く空氣は心持よく身體を撫で、
 居ります。

頼がてとある田舎の大根畑の上へ來ました。折
 しも畑に働いて居た一人の百姓女がふと上を見ま
 すと二匹の雁が一匹の龜を間に飛んで行くので
 女「ヤア皆の衆、御覽よお可笑な！龜が雁に連れ
 られて行くよ、アノ様はなんだろう。」と云つて
 ドツと笑ひましたので龜は怒ることか怒るまいこ
 とか大變に怒つて

「エ、ナニ、大さにお世話だ、己れ等は是から
 避暑に行くんだ。姿が何うでもお前の御世話に
 はならないぞ」と云はうとしました氣が附い
 て見ればあぶない處、此處が勘辨の仕所だと考へ
 直してちつと我慢して黙つて居りましたので其晩
 も或る山の中の洞の中へ宿る迄別段のこともなく
 てしまひました。

斯様にして次の日も又其次の日もよい鹽梅に蒸な
 くて飛んで行つて五日目の晝頃漸くのこととヒマ

ラヤ山の中腹にある王様の別荘町へ着きました。町はづれの松の木で一才一と休みして是から王様の御殿のお庭迄はもう一と飛で行かれると三人で喜んで

「よくマア龜さんも黙つて居たね、もう大丈夫だすぐ其處だからね」と云つて居りましたスルト自慢好な龜は

「それは黙つて居様と思へば何んでもないさ」と云つて居りました、此處は話に聞き及んだ通り時候もよく風も涼しく、かまけに景色が繪の様に奇麗で何とも云へぬよい心持でしたので龜はもう王様の御庭へでも来た積りで

「オ、あそこに横柄な鶴か居るよ、オヤ驚鳥も見える様だ」とそろ／＼例のおしやべりを始めました。其中に時が経ちますので雁は

「サア行かう」と又例の通りにして出掛けました。頓がて町の上へ来ますと往來で遊んで居た梔白子供が早速見付出して

「ヤ、あれを御覧よ、龜が雁に連れられて行くよ、」と一人が云ふと一人が

乙「オイ／＼雁よ鳥よ、其龜の子落しなよ、煮て食べるんだから」

と云ひましたので負け嫌の喧嘩好の龜は怒るまいことか大變に怒つて「ナニ？」と我知らず聲を出しました其時口がゆるんだ拍子にツルト棒から離れたが最後折角今迄辛棒して来た骨折も何も水の泡にして龜はスィット落ちて来て丁度王様のお庭の塀の中の庭石の上へビシヤリと落ちて甲良が壊れて死んでしまいました。

折しも王様は晝の御飯を仕舞つて昨日着いたばかりの侍講の役人を相手に例のお喋りを聞かせながら散歩して丁度此處へ御出の所でした。それで王様は不意に天から龜が一匹降つて來たので

王「オヤ、不思議なことがあればあるものだ」云はれながら能く／＼御覧になると是れは又不思議！王様が都の御殿の池の中に飼つて置かれた、王様の大事な龜でありましたので王様は吃驚なされ

王「是はまあ何うしたのだらう」と仰せになると傍に居りました。昨日都から來た侍講は大體の事

を知つて居りましたので

侍「夫れは斯く／＼次第で御座ります」とお話を申上上げました王様は何時になく黙つて御聞になつて、そして黙つたまゝ手を組んで首を傾けて考へて居られましたが、頓がでること、はたと手を御打ちなされて

王「侍講役！」と仰せられました

侍「ハッ、何か御用事でも」

王「此龜は何事か私に教へるのではあるまいか。」

私「今迄は時々喋り過ぎた様だが餘り喋べつて

此龜の様になつては大變だねと仰せられました

傍に居た外の役人達は若し是が自分達に仰せにな

つたなら、

「イへ決して左様のことは御座りません。王様に

はモット何か仰せて下さればいい」と皆王様の御

話を喜んで聞いて居ります」と斯う云ふ風に御

答をしやうと考へて居りましたが流石は侍講のお

役人、左様な空お世辭は申しません。

侍「仰せ御尤もに存じます。王様が御自身のお惡

いことに御氣付下さいますれば國中のものは何

れ程仕合せな事で御座りませう。」

王「左様か、能く申して呉れた。私も是から餘り

決して喋べらぬことにするぞ、よにと仰せられて

今迄の喋り王は今度は黙り王と云はれる位にな

つて政治は能くなり國中の人は大層喜びました。

目出たし

